星の絵本

星の絵本

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16691388

ダイの大冒険, バルトス, 子ヒュン, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, アバン

２ページ目が戦後のヒュンマ。子どもネタありですのでご注意ください。
新アニメ73話まで視聴済みならほぼネタバレなし。
１ページ目が、「あるべき未来に進むために」8 novel/15621709 とおもいきりつながっており、さらに、２ページ目は「天使のおとずれ」novel/16659087の次にくる話、ということで、どこにおいてよいのかわからなかった作品です・・・。
一応、こっちのシリーズに。

１ページ目は、2021.12.11ヒュンケルオンリーイベント「不死身の長兄」設置のweb拍手お礼画面より再掲載。２ページ目は書下ろし。
2021.12.29AM9:40最終シーン修正。

星の絵本

　騎士は、港の岸壁に立ち、そこから紺碧の海を眺めていた。
　ホルキア大陸の南西に位置するこの港町は、比較的温暖な地域だった。遠くに見えるのは水平線にすぎないが、ここから船で５日も行けば、ラインリバー大陸、ロモス王国に着く。かつては、ロモス側と船で人々が行き来をしていた交易の街だった。
　だが、数年前に、魔王軍がこの港町を制圧して以来、定期船は出てはいなかった。
　騎士は、骨の腕を組み、まっすぐに対岸にあるはずのロモスを見つめていた。海に変わった様子もなく、水平線に船影もない。
　部下からの報告を聞いても、近いうちに人間たちからの総攻撃となる様子までは、まだなかった。
　だが、それが表面上のつかの間の平穏に過ぎないことは、長年、魔王に騎士として仕え、戦場に長くあった彼にはよくわかっていた。
—まさに嵐の前の静けさ、よの。
　騎士は、二本の腕で腕組みをし、思案に暮れながら思った。
　魔王軍は、いまだに、ホルキア大陸のほぼ全土を制圧しており、この大陸においては、魔族が人間たちを支配している状況に変わりはなかったが、それは表面上のことにすぎないことは、幹部である彼にはよくわかっていた。
　つい数か月前までの１年間、魔王が、勇者によって、時のはざまに封じ込められていたのだ。
　その間、彼ら幹部は魔王軍を維持するだけで精いっぱいであった。その領土内では、もともと魔族による支配にあえいでいた人間たちが、魔王不在の間隙を突き、各地で蜂起をした。そのため、彼ら幹部は、その鎮圧に明け暮れた。
　その結果、ホルキア大陸内の一部の領土を奪われ、人間たちが独立を宣言した。旧パプニカ王国の王都であった港町は、早々に人間たちの手に落ちていた。この港町からさらに南西に行った場所にある古都だった。

ここも危機的状況にあったが、度重なる小競り合いの結果、なんとか、魔王軍の手に残されていた。
　その状況下で、勇者を先頭にした人間たちの反撃が始まったのだ。
　勇者も魔王とともに、時のはざまに封じられていたため、魔王不在の隙に勇者に攻め込まれるという最悪の事態は避けられた。
　だが、すでに時勢の流れは彼らにある。
　時を得たものが時流に乗ったときの勝機の強さは、戦場で暮らす彼には、肌身にしみてよくわかっていた。
　遠からず、魔王軍は崩壊するだろう。
　既に幹部も半分になっていた。
　彼は思案した。
　地底魔城を守る自分が最後の砦ではあるが、勇者が魔王の居城である地底魔城にまで攻め込んできた時には、果たして食い止められるだろうか。
　彼は、冷静に、双方の戦力を分析した。そして、足元に視線を落とした。
—難しい・・・。
　騎士はうめいた。
　魔王軍の勢力を維持することは、すでに困難な状況になっていた。
—わしは構わん・・・だが、あの子は・・・。
　彼は、騎士だった。
　だから、主君のために戦って果てるのであれば、それもやむなしと考えていた。むしろ本望ともいえる。
　だが。
　彼は、まだ幼い我が子の姿を脳裏に浮かべた。６年前に戦場で泣いていた赤子。その子を拾い、今日まで慈しみ、育ててきた。まだ幼い、人間の少年だ。
　血のつながりがないどころか、種族さえも異なるが、あの子を表現する言葉は「我が子」以外にはなかった。
—わしに何かあったら・・・あの子はどうなる。
　彼は騎士だった。

だから、もともと、いつ戦場で果てるかわからない任務を負っていた。
　そのため、彼は、彼自身にいつ何があってもいいように、あの子が自分で生きていけるように、可能な限り多くの知識や技術を教えてきた。
　だが、まだあの子は、６歳だ。
　大人の庇護を必要とする年齢だ。
—何故もう少しの時間が、与えられなかったのか・・・。
　せめて、もう少しあの子が大きくなってくれていれば、心置きなく戦えるものを。
　彼はそう思ったが、すぐに思い直した。
—いや、いくつになっても、いつまでもあの子の姿を見ていたいと思い、心残りに思うのであろうな。
　彼はそう思うと、ロモスにつながる海をまっすぐに見つめた。幸い、今日の海は凪いでおり、相変わらず異常も見受けられなかった。
「バルトス様。」
　配下のがいこつ剣士が、控えめに声をかけてきた。
　彼は振り返った。
　部下が報告をする。
「キメラでロモス側に斥候に出た部隊が戻ってまいりました。
　ロモスの港で、大型の船が建造されているそうです。砲門も認められるとのこと。」
「軍船だな。」
「はい。
　まだ建造途中ではあるようではございますが、いささか不穏かと。」
「そうだな。」
　しかし、彼は、苦渋に満ちた声で答えた。
「だが、今ロモスまで部隊を派遣するだけの余力がない。」
「バルトス様。」
「ここからロモスまで一軍を派遣すれば、その分、ホルキアが手薄になろう。さすれば、旧パプニカ王国の勢力が、この港を攻める。

今は動けん。
ホルキア上陸の際に叩くしかなかろうな。」
「・・・はい・・・。」
「しばらく警戒を怠るな。
この港が、まず、第一の防衛線となる。」
「はっ。」
それだけ指示をすると、彼は、岸壁から下り、街中へと戻った。
兵舎に戻りながら、彼は思案した。
部下に指示を下したものの、本来なら、軍艦の出撃前に攻撃するべきだ。それもできずに迎え撃つしかないという時点で、すでに負け戦だ。相手は、万全の態勢で、軍勢を送り込んでくるのだろうから。
―この戦い、危ういな・・・。
人間一人一人の力はさほど強くはない。だが、あちこちで蜂起を受けている今の状況では、それを制圧するのが精いっぱいであり、勇者の軍勢にまで手が回っていなかった。
彼は、街を歩きながら、ふと、１軒の店で視線を止めた。
そこは、書店だった。
ガラスの向こうに何冊もの、色とりどりの絵本が飾られ、小さな美術館のようになっていた。
彼は、頬をほころばせた。
彼の幼い息子が、絵本を読んでとせがむ姿を思い出したのだ。あの子は、絵本が好きだった。
騎士は、並べられた色彩の中で、ふと、１冊の絵本に目を止めた。
それは、表紙に大きな星の絵が描かれた絵本だった。
その表紙に描かれた星は泣き顔だったが、何故か、そこに彼の息子の笑顔が重なった。
騎士は、胸元に視線を落とした。
そこには、紙でできた、星の首飾りがかけられていた。
ずいぶん前から持っているものなのだろうか。端が折れて、多少くたびれていた。
騎士は、初めてこれを手にした時のことを思い返した。

—じゃーん！
　とうさん、はい。
　そう言って、彼の息子は、彼に星の首飾りをかけてくれた。小さな息子お手製の、勲章だった。
　騎士は、店の扉を開けると、店主に声をかけた。
「すまんな。あの絵本を、１冊もらえまいか。」
「は、はい。」
　店主は、騎士の姿を見て、すぐに魔王軍の軍人であることに気付いた。恐れおののき、震える声で応対した。
　店主は、絵本を紙で包むと、騎士にさし出した。
「ど、どうぞ。」
　すると、騎士は、店主の手に、金を握らせた。
「お、お代は結構です。魔王軍の方からお金はいただけません。」
　だが、彼はかぶりを振った。
「いや、受け取ってくれ。
　我が子に、人から奪ったものを贈るわけにはいかんのでな。」
　店主は、幾分か強引に金を握らされ、返すこともできずに受け取った。
　騎士は、店を出ると、購入したばかりの絵本を抱え、兵舎への道を急いだ。
　この絵本は、人間たちの作った、彼らの文字で書かれたもの。
　だが、彼は、息子には、人間の文字も読めるように教えてきた。
—このくらいの易しい絵本なら読めるであろうな。
　喜んでくれるだろうか。
　これを渡したときに息子の表情を思い浮かべると、骨しかないはずの彼の胸が温かくなった。
　あの子に、早いうちから人間たちの文字も教えておいてよかったと、彼は思った。想像よりも早く役立ちそうだな、と思い、彼は寂し気な笑みを浮かべた。
—わしがいなくなったら、あの子はどうなるのだろうか・・・。
　彼は祈った。
—人間の神よ。
　モンスターに過ぎないわしではあるが、あの子は、そなたたち人

間の神の庇護に入るべき幼子だ。どうか、わしの願いを聞いてほしい。
　わし亡き後も、あの子を守ってくれるものを遣わしてはくれまいか。
　その願いが叶うなら、このかりそめの命も、惜しくはない・・・。
　その願いが届いたかどうかは、わからなかった。

　ヒュンケルが、寝室で、洗いあがったタオルや子供服を片付けていると、不意に、猫の鳴くような声が聞こえた。
　ベッドを見ると、マァムの隣で眠っていたはずの息子が、むずかっていた。目は閉じたままだが、声をあげて泣いており、いかにも不機嫌そうだ。
　ヒュンケルは、慌てて我が子を抱き上げた。
　ベッドの上で横になっていたマァムは、寝返りを打つと、そのまま再び寝息を立て始めた。
　起こさずに済んだようだ。
　ヒュンケルはほっと胸をなでおろした。
　片手で小さな息子を縦抱きにし、ヒュンケルは、そっと寝室を出た。
　ヒュンケルは、階下へと続く階段を下りながら、腕の中の幼い息子に声をかけた。
「少し寝かしてやってはくれないか。母さんは疲れているんだ。」
　だが、まだ彼の腕に抱きかかえられる程度の小さな我が子は、彼の言葉には答えなかった。相変わらず、小さな体で懸命に泣き、そのくせ、目が明いておらず、起きているのか寝ているのかもわからない。
　仕方なしに、ヒュンケルは、そのまま幼子を抱きかかえて揺らしながら、彼が落ち着くのを待った。
—いくらあやしても泣き止まないことはあるわよ。
　レイラにそう言われていたのがむしろ心強かった。
　だから、泣き止まなくても仕方がないとは思ったのだが、２階の寝室で眠るマァムのことを考えると、早く泣き止んで静かにしては

くれないかと思わざるを得なかった。
　それにしても、赤ん坊というものは手がかかる。
　生まれたときには、体も柔らかく、ふにゃふにゃしていて、首も座っていなかった息子は、このごろは、男の子らしく、少しがっしりした体つきになったようだった。
　首が座った彼は、さっそく寝返りをし、このごろは、うつぶせになったまま、ばたばたと手足を動かしている。
—そろそろ動き出すわね。
　ますます目が離せなくなるわよ。
　レイラに近い未来の予言をされ、ヒュンケルは天を仰いだ。初めての育児に、すでに手いっぱい気味の彼は、先に控える強力なクエストにやや戸惑っている向きもあった。
　しかし、そうは言っても、これまでも困難を盛り超えてきた闘志の使徒である。
　何とかなるだろうという、どこか開き直った気持ちもあった。
　ヒュンケルは、泣き止まない息子を縦抱きにしたまま、その背中を軽く叩き、揺らしながら、リビングをそぞろに歩き回った。
　そうしていると、いつの間にか、腕の中の泣き声が小さくなってきた。何度もしゃくりあげ、そして、しばらくすると、すうと寝息を立て始めた。
　ヒュンケルはほっとした。
　どうも、起きたくないのに起きてしまったようだった。
　腹が減ったのなら、マァムを起こして乳をやらなければならないところだった。生まれた直後とは異なり、夜中に起きる頻度は減っていたが、彼は、まだ朝まで眠ってはくれなかった。昨日の夜も盛大に泣いてくれ、マァムは息子に乳をやりながら、そのまま寝てしまっていた。
　今日はまだ昼下がりであったが、この日、何度目かの授乳をすると、マァムは、息子と一緒にベッドで寝入ってしまっていた。
　疲れているのだろう。
　そう思った、ヒュンケルは、泣き出した息子を抱きかかえてリビングまで下りてきたのだった。
　腕の中に抱きかかえた息子は、ヒュンケルの厚い胸板に、ぺった

りとそのやわらかい頬をつけ、気持ちよさそうに寝息を立てている。意識の途絶えた小さな腕が、ぷらんとぶらさがって、ヒュンケルの歩みに合わせてゆらゆらと揺れていた。
　これで一安心、と言いたいところだった。
　だが、ベッドに置いたらまた起き出すかもしれない。
　仕方なしにヒュンケルは、そのまま息子を抱きかかえ、やはり所在無さげにうろうろとリビングを歩き回っていた。
　そのうち、息子の寝息が深くなったように感じられた。
　もう座っても大丈夫だろう。
　ヒュンケルは、椅子を引くと、息子を抱きかかえたまま椅子に腰かけた。そして、テーブルに置きっぱなしになっていたネイル村長老からの託文（ことづけふみ）を開き、明日は長老のところに行くかと思案していた。
　ヒュンケルは、ここネイル村では新参者であることは間違いないのだが、レイラの後押しだけではなく、彼自身の知識や経験が稀有なだけに、長老からは村の運営に関して様々な相談を受けていた。この託文の内容は、この春の作付けのことと、食料の備蓄のことだった。中を読みながらヒュンケルはどう説明するかと考えていた。
　そのときだった。
　不意に玄関の扉がノックされた。
　この家に頻繁に尋ねてくるのは、義母のレイラか、あるいは、長老の遣いの者か、村塾の関係者か、いずれにしてもネイル村の者だろう。
　ヒュンケルは、腕の中の息子を起こさないようにして立ち上がると、彼を抱きかかえたまま、器用に片手で扉を開けた。
「ぐっどあふたぬーん、ヒュンケル。」
　扉を開けると同時に飛び込んできた、場違いなほど陽気な声に、ヒュンケルは思わず扉をそのまま閉めそうになった。いるはずのない人の姿をドアの外に見てしまった。
　いっそ幻であってくれればよかったのに。
　だが、実体を持ったその人は、また明るい声で彼に話しかけてきた。

「おやあ、眠っちゃっていますね。かわいらしい。あなたによく似ていますね。」
　ここまではっきり声をかけられると、もはや幻覚では片づけられなかった。ヒュンケルは、大きくため息をつくと、言葉を絞り出した。
「・・・先生・・・何しに来たんですか・・・。」
　すると、アバンは、さも当たり前のことのように切り返した。
「出産祝いに決まっているじゃありませんか。」
　ヒュンケルは、聞くだけ無駄なような気もしたが、とりあえず、当たり前のことを尋ねた。
「公務はどうしたんですか？こんな遠方まで来ている余裕はないはずです。」
　大魔王との戦いの後、一時期、フローラ、アバンの元で、カールの騎士団に所属していたことのあったヒュンケルは、アバンの多忙ぶりをよく知っていた。
　王配たるアバンの公務は、各大臣からの内政、外交に関する報告の把握や裁可だけではなかった。アバンは、関心のある魔法の研究や産業技術の開発に関しては、その詳細な報告を求めるだけではなく、具体的な提案をし、指示を下す。
　おかげで、カールの産業の技術力は向上していたが、アバンは、個々の案件にまで首を突っ込むので、時間などいくらあっても足りなかった。
　だが、アバンは、しれっと答えた。
「そりゃ私はルーラ使えますからね。カールからだって、ひょいっと一瞬で。
　側近には、これから多数の決裁案件を処理するから、３時間は執務室に入らないようにってきつく言っておいたんですよ。」
　ヒュンケルは、空っぽの執務室前を守護する兵士や、決裁待ちの大臣たちがその廊下を右往左往する様を思い描き、彼らが気の毒になった。そして、一応の心配を師にしてみた。
「・・・終わるんですか、こんなところまで来てしまって。」
「いえ、終わらせてきました。
　あと２時間は大丈夫です。」

ヒュンケルは、この人に心配するだけ無駄だったなと思い直した。アバンは、初めから１時間で終わる仕事であったのに、ネイル村まで往復する時間を捻出するために、わざと「３時間」という時間を示したのだと、彼をよく知るヒュンケルはすぐに気付いた。
「・・・だいぶサバ読みましたね。」
　すると、アバンが身を縮めて、ヒュンケルに対し、困ったような顔をした。
「ところで、ヒュンケル、中に入れてもらえませんか。外、結構寒いんですよ。この子も冷えちゃいますよ。」
　そう言われると、このまま追い返すわけにもいかない。仕方なしに、ヒュンケルはアバンを家の中に入れた。
「適当に座っててください。この状態ですから、お茶も出せませんよ。」
「あ、大丈夫です。お構いなく。」
　ヒュンケルは、寝入ったばかりの息子を抱きかかえているので、片手しか使えなかった。
　アバンは気にする様子もなく、手近な椅子に腰を下ろし、そして、もってきたナップザックの中から、何やらいろいろと包みを出し始めた。鼻歌交じりで、実に楽しそうだった。
　アバンは、その作業をしながらヒュンケルに尋ねた。
「マァムはいないんですか？」
「上で眠っています。昨日も夜中に起こされているので、今は寝かしてやりたいんです。」
「そうですか。」
　アバンは、実に嬉しそうな顔をすると、目を細めて、立ったままの一番弟子を見上げた。
「・・・どうかしましたか？」
　ヒュンケルは、怪訝そうにアバンに尋ねた。
「いえね、嬉しくて。」
　アバンは言葉を続けた。
「あなたとマァムに赤ちゃんが生まれたって聞いて、私は嬉しくて仕方なかったんですよ。あなた方の子ども、って言ったら、私にとっては孫みたいなものです。早く会いに来たかったんですが、産

後すぐでは、マァムの体にも障るなあと思って遠慮してたんですよ。」
「・・・貴方のところの王女と、うちの子では、大して年も変わらないと思いますが。」
「それはそれ、これはこれです。」
　アバンは、またもや、しれっと答えた。
　昔からそうだった。言葉でヒュンケルがアバンにかなうはずがないのだ。
　アバンとフローラの間に生まれた王女は、もうすぐ３歳になる。言っていることはヒュンケルの方が正しいのだが、アバンの抱く思いとしては、彼の言っているとおりなのだろう。
　そうしているうちに、階段から物音がした。
　ヒュンケルもアバンも人の気配を感じ、そちらに視線をやった。
「どうしたの？ヒュンケル？誰か来たの？」
　眠そうに眼をこすりながら、マァムが階段を下りてきた。
「マァム。」
　ヒュンケルが、気づかわしげにその名を呼んだ。
　アバンは、途端に気まずそうな顔をした。一番弟子に怒られるのが目に見えていた。
　アバンは、申し訳なさそうにマァムに声をかけた。
「ごめんなさい、起こしちゃいましたね。」
　その思いがけない声と姿に、マァムは裏返った声をあげた。
「先生！？」
「お久しぶりですね、マァム。体調はどうですか？」
「どうして、先生がうちに？」
「出産祝いですよ。本当はもっと早く会いに来たかったのですが、産後すぐでは、あなたの体にも障るなあと思って遠慮してたんですよ。」
　先ほどヒュンケルに言った言葉と全く同じ言葉を、アバンは口にした。
「先生でしたら、いつでも大歓迎です。」
　マァムは嬉しそうにそう言った。
「先生、ちょっと待っててください。いま、お茶を淹れますね。」

「・・・いい、俺がやる。マァムは座っていてくれ。」
　ヒュンケルは、キッチンへ行こうとしたマァムを引き留めた。そして、代わりに、腕の中で眠ったままの我が子をマァムに引き渡した。
「寝て少し経っているからもう大丈夫のはずだ。」
　マァムは、腕の中に視線を落としながら、眠っている小さな息子を愛おし気に見つめた。
　そして、ヒュンケルを見上げると、マァムは礼を述べた。
「寝かしてくれたのね。ありがとう。」
　すると、アバンは、思わず感想を漏らした。
「いいお父さんですね。」
「先生は黙っていてください。」
　途端に、ヒュンケルにぴしゃりと言葉を止められた。
　ヒュンケルとしては、もうとうにアバンに対する反抗期など過ぎていたのだが、この日ばかりは気恥ずかしく、以前の言い方が出てしまっていた。
　ヒュンケルがキッチンへ行くと、マァムは、息子を抱きかかえたまま、リビングの椅子に座った。そのマァムに、アバンは嬉しそうに声をかけた。
　キッチンに立ったヒュンケルの耳に、二人の楽しそうな会話が聞こえてきた。
「そうそう、出産祝いを持ってきたんですよ。いろいろありますから見てください。」
「わあ、かわいいベビー服！カール織ですね？」
「ええ。こっちは刺繍が入っているのがいいでしょう？」
「これ、先生が選んでくださったんですか？」
「私だけじゃなくて、フローラも、ね。」
「ありがとうございます。」
「服は、洗い替えに何枚あってもいいでしょう？」
「はい。」
「小さい子ってすぐ大きくなっちゃうから、もったいないですけどね。」
「小さくなったら村の子にもあげられますし、それに、うちもまた

使うかもしれませんから・・・。」
「おや、楽しみですね。」
「先生！」
　話がおかしな方向に行きそうだったので、思わず、ヒュンケルはアバンを制止してしまった。
　それからも、アバンとマァムの楽し気な会話は途切れることはなかった。
　ヒュンケルは、かまどの火を起こして湯を沸かし、とっておきの紅茶を淹れると、アバンの前に差し出した。高級品であり、こういう時のためにとっておいた紅茶を淹れたあたりに、ヒュンケルのアバンに対する敬意が現れていたのだが、口には出さなかった。
「お茶菓子は持参で来ました。私お得意のアップルパイです。マァム、好きですよね？」
「はいっ！」
　片腕の使えないマァムに変わって、アバンがアップルパイをとりわけ、マァムの前に進めた。マァムは、目をきらきらさせて喜んでいた。
　ふと、ヒュンケルは、テーブルの上に置かれたいくつものおくりものの中に、１冊の本を見つけた。ヒュンケルはそれを手に取った。
「・・・先生、これは？」
「あ、絵本です。」
「まだうちの子には早いですよ。」
「それがね、マァム、言葉が理解できないような赤ちゃんのうちからでも、絵本を読んであげるといいらしいんですよ。
　ほら、あなたが以前働いてくれていた国際児童支援機構が報告してくれたんですけどね。この前の大魔王戦で孤児になった子どもたちを育てている孤児院からの報告が上がったんですよ。それによると、戦災孤児の子どもたちも、赤ちゃんのうちから絵本の読み聞かせをすることによって、情緒の安定と言葉の発達が見られたっていうんです。」
「へー、すごいですね！」
「すごいでしょう？私もびっくりしたんですよ。

だから、あなた方にも、１冊絵本を贈ろうと思ってね。」
　だが、２人の会話は、ヒュンケルの耳には入っていなかった。
ヒュンケルは、絵本の表紙に釘付けになっていた。
　ヒュンケルは、絞り出すように、ようやくひとことだけをアバンに尋ねた。
「・・・これは、どの地方の本ですか。」
「パプニカです。結構古い本のようで、あなた方が生まれた頃に出版されたみたいなんですよ。そういう息の長い絵本って名作が多いですからね。
　私も読んでみましたけど、素敵なお話でしたよ。」
「・・・そうですか・・・。」
　そのままヒュンケルは、その贈られた絵本に視線を落としていた。
　そこには、困ったような泣き顔をした星の絵が描かれていた。
　表紙に書かれた文字は『いちばんぼしはひとりぼっち』。
　その耳に馴染み、見慣れた絵本の表紙に、ヒュンケルはアバンに尋ねた。
「・・・先生、知っていたんですか？」
　だが、アバンは、きょとんとした様子で答えた。
「何をですか？」
　ヒュンケルは、小さな声でアバンに向けてつぶやいた。
「・・・いいえ・・・なんでもありません。」
　そう言いながら、ヒュンケルは、おそらくは師の考えていたであろう思考の軌跡をたどり、目を閉じた。
　そして、しばし、思考の海に沈んでいたが、やがて、ヒュンケルは、まっすぐにアバンを見ると、ひとこと、礼を述べた。
「ありがとうございます。」
　アバンは何も言わずに、にこにこと微笑んでいた。

　アバンは、嵐のように去っていった。
レイラにも会ってくると言って、アバンは、２時間が経つ前に彼らの家を辞した。
「相変わらずね、先生って。」

マァムは苦笑した。
「そうだな。」
　ヒュンケルもうなずくしかなかった。
　マァムの腕の中では、目をさました小さな息子がテーブルの上に並んだ見知らぬものに興味津々で、懸命に手を伸ばしていた。
　マァムは、息子をあやした。
「はいはい。みんな、あなたのものよ。あなたにって、さっきのおじさんが持ってきてくれたのよ。」
　そういうとマァムは、アバンの手土産の中にあった小さな木製の子馬を取り出すと、息子に握らせた。彼は、初めて見た玩具を嬉しそうに眺めていると、大きな口を開けて、かぷっと食いついた。
「こらこら、食べ物じゃないわよ。」
　ヒュンケルも苦笑した。
「先生の言ったとおり、読んでみるか。」
「あ、絵本ね。私が読もうか？」
「いや、俺にやらせてくれないか。」
　そういうと、ヒュンケルは、先ほどのアバンが置いて行った出産祝いの中から、再び、星の絵本を取り出し、その手に取った。
　マァムが息子を抱きかかえたまま椅子に座り直すと、ヒュンケルもその隣に座った、
　ヒュンケルが表紙をめくると、１ページ目には、表紙と同じ、泣き顔の星が描かれていた。
「いちばんぼしは、ひとりぼっち。おひさまのしずんだ、よるのそらで、ひとりでかがやいている。」
　ヒュンケルはページをめくった。
　ページをめくるごとに、次第に、一番星の周囲に、星の姿が増えていった。それとともに、泣き出しそうな顔だった一番星の顔が、少しずつ、和らいでいった。
「あおいほしさん、こんばんは。
　いちばんぼしは、ゆうきをだして、よびかけた。
　すると、よぞらにかがやきはじめたあおいほしが、にっこりとほほえんだ。
　いちばんぼしさん、こんばんは。

いちばんぼしはうれしくなった。
　すると、こんどは、よぞらにあかいほしがかがやいた。
　いちばんぼしは、あかいほしにはなしかけた。
　あかいほしさん、こんばんは。
　あかいほしは、つよくかがやいて、いちばんぼしにこたえた。
　いちばんぼしさん、こんばんは。」
　ヒュンケルは、読みながら、幼かった頃の自分の幻を感じた。少年ヒュンケルが、いまの自分のすぐそばで、床に寝転がりながら、この絵本を読む声を聴いているように感じられた。
　絵本のページをめくる自分の指に、骨の指が重なって見えた。
　ヒュンケルは、最後のページをめくった。
　そこには、笑顔の一番星の周囲に、無数の星たちが描かれていた。
　満天の星空だった。
「そらには、たくさんのほしがかがやいている。
　もう、いちばんぼしは、ひとりじゃない。
　たくさんのほしたちにかこまれて、きれいに、つよく、かがやいていた。」
　ヒュンケルが読み終わると、マァムがつぶやいた。
「いいお話ね。」
　ヒュンケルはうなずいた。
「ああ・・・俺が一番好きな絵本だった。」
ヒュンケルは、絵本を閉じた。
裏表紙には、最後のページと同じ、笑顔の一番星が描かれていた。
アバンは、ヒュンケルと初めて出会ったときから、彼が魔族の文字だけでなく、地上の文字も読めることを知っていた。
バルトスが星の首飾りをかけていたことも知っていた。
２０年以上前にパプニカで発行されたというこの絵本を、もしかしたら、幼いヒュンケルが読んでいたかもしれないと思って、あえて、選んでくれたのだろう。
－大当たりですよ、先生・・・。
ヒュンケルは師の飄々とした笑顔を思った。
　ヒュンケルの前に、幼い自分の幻影が浮かんだ。

そして、その少年は、父親となったヒュンケルに向かって、嬉しそうに、しかしどこか悪戯めいた顔で笑みを浮かべた。
　少年は、ヒュンケルに背を向けると、どこかに向かって走り出した。
手を振り、走り去る後ろ姿は、振り返ることはなかった。
　その背を、ヒュンケルは、感慨深く見送っていた。